



CONTENTS

巻頭寄稿	1
活動紹介	2~3
公開講座紹介	4~5
活動紹介	6~7
インフォメーション	8

静岡文化芸術大学 文化・芸術研究センター
 静岡県浜松市中区中央2丁目1-1 〒430-8533
 ●Tel:053-457-6113 ●Fax:053-457-6123 ●http://www.suac.ac.jp/

A r t s & C u l t u r e



文化政策学部長
根本敏行
 Toshiyuki Nemoto

同人市民社会と創造都市 ~あなたは誰?~

都市や文化の領域で「創造都市」という考え方がある。本稿では創造都市の人的側面、特に市民社会のあり方についての論点を提起したい。それは、耳慣れない造語で「同人市民社会」と名づける。

1. お百姓さんと前近代

日本の前近代社会を象徴する言葉として「お百姓さん」を取り上げる。それは「同人市民社会」のモデルでもある。

解釈には幅があるが、もとの「様々な職業」という意味から「何でも一人でごなす人」という意味もある。

お百姓さんは、納税も兼ねる米作を主体に、野菜類や味噌醤油・漬物等加工食品の自給自足、機織で衣服、藁から屋根材・壁材・蓆・縄・俵等の収納・包装から雨具まで作り、簡単な農機具や家屋の修理、農地や水路の普請もこなす上に、お祭りの時にはお神楽の舞や笛太鼓の演者になる。時には隣国との戦闘にも駆り出される。

19世紀後半になると都市の市民が登場するが、祝祭のときは市民が演者になってハレとケが交錯する。欧州のカフェでは文学・音楽・百科全書などの文化全般が花開くが、その揺りかごは芸術家が専門分化する前段階の登竜門としての同人誌や、同人活動であった。

2. 近代化とアンチテーゼ

近代化とは、工業におけるフォーディズムに留まらず、人的資源を含む社会全体の分業化である。あらゆる分野のプロが登場し生産者と消費者は分断される。文化芸術においても作家、プロデューサー、興行師などと観客聴衆が分化し芸術大学が造られる。市民は資本・資源を持たない労働者であり、文化の受容者、消費者として位置づけられ、都市計画でも住宅地と工業地、商業地に区分けして専門ごとの文化施設が建設された。お百姓さんより専門農家をよとした。

近代化によって人間は単機能に還元され社会の歯車となる、いわゆる人間性の疎外論が登場する。これらはディストピアとして文芸作品にも登場する。映画ではチャップリンのモダンタイムスやフリッツ・ラングのメトロポリス、松本零士銀河鉄道999では主人公の鉄郎が不滅の機械の体を求めて一本のネジに変身する。

ジョン・ラスキン、ウィリアム・モリスらのアーツ&クラフツ運動や柳宗悦の『民藝』運動、ジェイン・ジェイコブズによる近代都市批判（創造都市論につながる）などがこうした近代化へのアンチテーゼであり、A.トフラールは生産者と消費者が渾然一体となったプロシューマーの登場を予言した。

3. 市民力の時代

近年は、まちづくりや文化芸術の分野でも脱近代化・分業化の動きが目立ってきた。背景には人間性の疎外のほか、少子高齢化と財政の逼迫といった都市経営上の課題もある。

人気番組のNHK「ご近所の底力」では素人の市民自らが課題に立ち向かった。阪神淡路震災後は日本のボランティア活動が活発化する。これらプロに任せないまちづくりは市民の自己実現と生涯学習でもあり、分業による非効率の解決、持続可能性の担保にもなる。

豪雪で集落が孤立する長野県栄村では、住民が国の介護ヘルパー資格を取る政策により、全集落に24時間365日ヘルパーが常駐する「下駄ばきヘルパー」を導入した。専門の業者に頼るより財政的に効率的であり、ご近所の顔見知りで支えあう安心感もある。保育士経験者による「保育ママ」も同様だ。

全国の博物館・美術館でも、ボランティアのスタッフがギャラリールーム・トークなどの多様な活躍に参画する。例えば九州国立博物館では市民有志の「環境ボランティア」が修復作業などバックヤードで活躍する。専門技能の講習は受けるが学芸員ではないので人件費はかからず、参加者の自己実現・生涯学習の機会にもなる。そして災害時のリスク対策にもなる。

リスクマネジメントの観点からも、いざという時に立ち上がる市民は重要である。消防団は、出動してもしなくても人件費を払い続ける消防署よりも財政的に有利である。震災などで活躍するNPO国境無き医師団では医師や看護師がボランティアで活躍する。フランスでは医師団に陸軍軍医がいるが、スイスや韓国など国民皆兵の軍隊の予備役同様である。いずれもある程度の技能を持つ市民が広く地域に埋め込まれている状態だが、軍隊と市民ボランティアとの決定的な違いはその発動が命令ではなく市民の自由意志によることである。

4. 同人市民社会論

このように分業化による専門を脱し、市民が自らの自由意志で創造的な複数の活動に関与できるような社会が、21世紀に期待される創造都市なのではないか。ネットではウェブ2.0論、CGM、UGCなど、ユーザー自身が創作に参加するプロシューマー社会が既に始まっている。ネット社会でオタクと呼ばれる人材の活躍の舞台はコミケットなど同人誌・同人音楽・同人活動である。同人活動には定年もない。

あなたは誰?と聞かれたとき、サラリーマン、主婦、学生です、という答えではなく、あるときは会社員、あるときはラッパ吹き、祭りの舞手、ニコニコ動画の作者、ボランティアで子育ての家庭教師役でもある、というような市民が作る社会が創造性豊かかつ経営効率もよく、リスク管理にも強い社会なのではないか。

多文化交流を促すお芝居ユニット「ぷちまり」

池上重弘 (文化政策学部国際文化学科)

本学の学生たちがメンバーとなっているお芝居ユニット「ぷちまり」は、お芝居を通して言語や文化的背景の異なる人々(とりわけ子どもたち)を結びつけることを目的として活動している。そもそもこの活動は、2011年度・2012年度の静岡文化芸術大学文化・芸術研究センター長特別研究「多文化共生社会の実現に向けた交流支援と学習支援のあり方をめぐる実践的研究」(研究代表者:池上重弘)の一環として始められた浜松市東区長上地区での交流支援活動に端を発している。長上地区にある浜松市立与進中学校とブラジル人学校 EAS の交流を支援し、さらにその活動を地区の長上公民館(現、長上協働センター)の活動につなげてゆこうというコンセプトに基づく活動である。

浜松市においては、市西部の浜松市外国人学習支援センター2階にある南米系外国人学校ムンド・デ・アレグリア校が行政の大きな支援を得て、地域コミュニティ(旧雄踏町)に受け入れられつつある。EASのある長上地区ではこうした行政の積極的支援がなかったため、静岡文化芸術大学・日伯交流協会の連携により、東京に拠点を置くプロの俳優集団「お芝居デリバリーまりまり」の協力を得ながら、与進中とEASの交流を支援し、さらにその結びつきを協働センターの活動の中で紹介することにより、「顔の見えない存在」となっているブラジル人学校が地域のアクターとして受け入れられるような環境を作った。

黒い衣装のみを身につけ小道具も大道具も使わないまりまりの演目の多くは、昔話を題材としたものでありながら、独特の解釈を加え、文化の壁を越えて世界中の人々にアピールする普遍的な力を持っている。一見すると喜劇風、さらに言えば声帯模写付きパントマイムのようにも見えるが、その実、深いところまで計算された演出と緻密なりハーサルに裏打ちされた精度の高いパフォーマンスアートであることがわかる。

「ぷちまり」はそのまりまりのフォーマットを借りて、学生たちが独自に演目を編み出したユニットである。与進中、EASを結ぶプロジェクトにおいては、お兄さん・お姉さんのような立場で潤滑油役を果たしている。

2013年10月11日から20日までの10日間、本学西ギャラリーで開催された展示イベント「届け!お芝居デリバリーと私たちの想い」(主催:静岡文化芸術大学、日伯交流協会)のギャラリートークに代わるものとして、10月12日(土)に両校の生徒たちと「ぷちまり」による交流お芝居会が行われた。

日本人の中学生やぷちまりの学生たちがポルトガル語で演じたり、ふだんは日本語の壁に苦しんでいるフィリピン人の中学生がタガログ語で堂々と演じたりするなど、まさ

に多文化・多言語な背景を生かした工夫がなされていた。

そこでは与進中とEASの保護者も集い、日本語、ポルトガル語、タガログ語が飛び交うお芝居に笑いの声がこだました。言語を超え、文化を超えて、人々の気持ちがひとつにつながった素晴らしい機会であった。

この交流お芝居会には、NHKの「まりまりの萩原ほたか氏(前列左)とぷちまり取材が入り、夕方の県内ニュースで放映された。また、ポルトガル語メディアのTVカメラも入り、ブラジル人コミュニティ側にもこの機会の様子が伝わった。活字メディアでは静岡新聞とニッケイ新聞(ブラジルの邦字紙)が関連記事を掲載した。ニッケイ新聞の記事には、在浜松ブラジル総領事館のピラス総領事による「浜松はもう立派な多文化都市だね」とのコメントも掲載されている。

多文化共生社会を担う若い世代が交流する契機は多々あるだろうが、お芝居という手法を用いて、互いの理解と交流を図る「ぷちまり」の活動の今後の展開が楽しみである。



まりまりの萩原ほたか氏(前列左)とぷちまり



西ギャラリー前での交流お芝居会(2013年10月12日)

活動紹介

バンバン！ケンバン♪はままつ2013

梅田英春 (文化政策学部芸術文化学科)

「バンバン！ケンバン♪はままつ」は、さまざまなキーボードがテーマになって繰り広げられるイベントです。監修者として教員の名前は連ねていますが、イベントの準備・運営はすべて学生有志により行われています。世界的な楽器メーカーが集まり、世界の音楽文化に貢献する浜松ならではのイベントとして2012年に開始され、今年度の「バンバン！ケンバン♪はままつ2013」は2回目の開催で、今回は、講演、ワークショップ、コンサートがあわせて5番組、その他に展示コーナーを設けました。

午後開始のプログラムに先立ち、午前中には、鍵盤ハーモニカ奏者による大友剛氏による子どもを対象とした鍵盤ハーモニカのワークショップが開催されました。日本国内をシェアする鍵盤ハーモニカのメーカー、鈴木楽器製作所、ヤマハは二社ともに浜松にあり、この楽器は浜松発で全国展開する楽器の一つといえるでしょう。小学校の授業の教材として用いられるメロディオンやピアノは子どもたちに馴染み深い楽器ですが、実はさまざまな奏法や音色を出すことができます。大友氏はそんな鍵盤楽器の面白さを子どもたちに伝えながら、鍵盤楽器としての可能性を示唆してくれました。またその後開催されたコンサートにはたくさんの親子連れが集まり、子どもたちが目を輝かせてその演奏を聞き入っていたのが印象的でした。また鍵盤ハーモニカ奏者 Tommy Cho 氏によるライブも開催されました。こちらは大人が十分に楽しめる鍵盤ハーモニカの魅力を追及した選曲や音色が印象的でした。

今回は鍵盤ハーモニカ以外に、ミニ・ピアノとアコーディオンをとりあげました。ミニ・ピアノはいわゆる「トイ・ピアノ」とよばれているもので、浜松の楽器メーカーの一つ、河合楽器製作所が独自につくったものです。当初は「玩具」として考えられたものでしたが、徐々に「楽器」として現代音楽の作曲家などにとりあげられるようになり、今では世界にこのピアノを演奏する「トイ・ピアニスト」がいるほどです。今回は日本で活躍する須藤英子氏を迎えて、このピアノの新たな側面を紹介していただきました。またアコーディオン奏者のかとうかなこ氏と、ギタリスト岡崎泰正氏のデュオでは、アコーディオンの種類による音色の違い、浜松の楽器メーカーの一つ、ローランドが開発した電子アコーディオンも紹介され、大勢の観客は、浜松から進化していくアコーディオンの可能性を実感したのです。

これらのどのコンサートも、単に音楽を聴いてもらうだけの「コンサート」にとどまることなく、演奏者自身が楽器の特性や演奏法を観客に話しながら行う形態をとっています。演奏者の言葉を聞いてから、観客は演奏者の奏でる

音に耳をすますと、それまでとは違う音の世界が広がり、新たな発見があるものです。「バンバン！ケンバン♪はままつ」は、そんな体験をしていただける大学ならではのイベントでした。

さて、こうした公演プログラムの他に本イベントでは、昨年度まで本大学の准教授として、このイベントの立ち上げ、企画・運営に携わってきた小岩信治氏（一橋大学准教授、本学非常勤講師）による「バンケン♪の可能性」と題した講演が行われました。小岩准教授は、講演の中で歴史的に数多くの音楽家が活躍したウィーンを例に引きながら、「音楽家の様々な要求やアイデアを入れながら楽器を革新していったウィーンの楽器製造業者の音楽文化への貢献は極めて大きい。ウィーンは音楽の街であり、同時に楽器の街でもある」と述べ、同じように浜松から世界の音楽創造に貢献する楽器メーカーの発展の歴史は、そのまま浜松の文化史の研究対象であり、「バンケン」のようなイベントを浜松の大学で開催することの意義を改めて強調しました。

また今回のイベントではユニークな展示も行われました。ギャラリーで開催された鍵盤ハーモニカの歴史に関する展示は、鍵盤ハーモニカを製作するメーカーの協力を得てデータを収集し、それを年表としてまとめました。教材である鍵盤ハーモニカは、なかなかピアノやオルガンのような「地位」を獲得できず、それゆえに歴史研究もほとんど行われておらず、古い楽器は捨てられるか、押し入れの奥にしまいこまれる消耗品のような運命をたどってきたのです。

大学や浜松のまちなかで二日間にわたり、80ものプログラムを用意した大規模な「バンバン！ケンバン♪はままつ2012」とくらべると、今回のイベントは、規模を極端に縮小したことから「前年度と比べると物足りなかった」という声もちらほらと聴かれましたが、今回はほぼ半日ながら、商業ベースの公演とは異なる大学のイベントとして、「ケンバン」の魅力をもっと多くの方々、さまざまな世代に発信できたいと思っています。

来年度も秋には「バンバン！ケンバン♪はままつ2014」を予定しており、すでに学生達は来年の企画について検討を始めています。企画段階から学生たちが案を出し合い、テーマを決め、演奏者との折衝をし、広報、マーケティング、舞台運営までを行っていくことは、学生たちにとってアーツマネジメントの実践の場です。来年は、今回以上に魅力的な「バンバン！ケンバン♪はままつ2014」を皆さまにお届けしたいと思っています。

これからのプロダクトデザイン

峯 郁郎 (デザイン学部生産造形学科)

身近なところで、デザインされたモノ・コトと普通の生活との関係において、分かり易く時代を反映していると感じるのが毎年販売されるお年玉付年賀はがきの当選景品だ。2013～14年の場合、1等景品が現金1万円という企画となり話題を呼んだ。モノがあふれる時代、もうすでに生活者が憧れるモノは行きわたってしまったのか？高額過ぎて手に入らないというわけでもないが、景品としていただけるなら嬉しいと感じるプチ憧れを抱かせる製品たちは、それぞれの時代を反映して来た。ミシンや写真機、8ミリ映写機、電気掃除機、洗濯機、ポータブルテレビに海外旅行券など、もはや死語と化したモノも有る。昨今はハイビジョンTVや電動自転車、カーナビなど、今の生活を快適に暮らすモノたちが顔を揃えている。将来的にはアトムのようなロボットや宇宙旅行なんてことになって行くのかも知れないと想像していたさなか、今、現金という現実となり、改めてモノと人、生活との関係性について考えさせられてしまう。

デザインという言葉は子供たちも知っているポピュラーな英語だが、元々は designare というラテン語（一定の秩序を表す）で、現状では既成概念を壊して再構築する、と言った意味や、考えや想いを視覚化する、と言った意味合いで使われることもある。デザインの大きな役目の一つとして、豊かで明るい未来の姿を「視覚化」して見せる、という試みが何度となく行われて来た経緯がある。約100年前、大正時代の初め頃に描かれた東京の暮らしには、高速道路、動く歩道、ドーム型屋内野球場などが描かれ、ちゃんと現実になっているモノも有れば、空飛ぶタクシーや全身タイトのような服装、街頭テレビ等の予想は大きくはずれることになった。中でも予測できなかった大きな出来事はネット社会と個人端末に支えられた「IT」が発達した生活。コミュニケーションの「C」を加えたICT社会という概念は描かれていない。これはあの有名なサンダーバード（国際救助隊）でも扱われていない。サンダーバードは2065年の姿を描いていると言われていて、スタイリッシュで且つ説得力のある乗り物や道具、設備がたくさん登場するが、ネット社会にはなっていないようだ。鉄腕アトムの中で、アトムが博士に緊急連絡を取ろうとして公衆電話を探し回るシーンが有り、アトムが存在するような未来に携帯電話が登場しないのも興味深い。科学の未来予想は80%はズレるというデータもあるが、この数字を見て嘆くよりは、それくらい人間の想像力が豊かだと肯定的に捉えたいと思う。そんな科学の未来予想をビジブルにして来たのがデザインのカだ。

ロボット研究はさまざまな視点で進められていて、姿形が人間に近いもの、機械っぽい外観をしているが振舞いが人間的なもの、人の運動機能を拡張・強化するもの、そばに居てくれるだけで癒されるもの、勝手に部屋をキレイにしてくれるもの等いろいろ開発されている。これらの研究は進めば進むほど、人間らしさとは何か？に帰結すると言われている。ロボットのような物理的なモノのみならず、

楽器メーカーが開発した音声合成技術でデータが歌うソフトウェアも、人間らしい歌いまわし、ニュアンスに迫る為に多大なる労力がかけられている。

今、欠かせない話題の一つは3Dプリンターの普及、米国オバマ大統領も国をあげて取り組むことを宣言している。ものづくりの概念が大きく変化するのであることは明白で、それは物の流通にまで革命的な影響があるとされている。メーカーは何年にも亘ってサービスパーツを在庫している現状に対して、データストックさえあればいつでもユーザーに届けることができるようになるはずである。今後はより高性能で安価なマシンが普及して行くことになるだろう。

先ほど触れたロボット開発も含め、今いろいろなシーンで「無人化」が起こっていて、人間はより人間らしく振舞い、生きる為にもその周辺では無人という状況が拡大して行くと思われる。自動車メーカーのみならず情報系の企業も含めて自動運転カーの開発が加速している。テクノロジーの進歩に法整備が追いつかず、ハンドルを手で持たない車の公道走行に対してのさまざまな制限、ルール整備が急がれるところだ。もう一つ無人化が進んでいる分野が軍需産業である。無人軍用機は偵察にとどまらず、攻撃、爆撃と言った戦闘までやってしまう性能を備えている。歴史的に見ても軍需産業が技術やデザインの最先端を切り開いて来た事実があり、今後も世界平和を前提に注視して行かなくてはならないと思う。

プロダクトデザインの世界は、広く地球の平和と安全に継続的な貢献が求められることは言うまでもなく、日本というエリアに限っても、マイナスをゼロに戻す部分（たとえば震災復興）と現状にプラスして行く部分（たとえば東京五輪や世界的な和食への関心）とのバランスの中でステップを進めていかなくてはならない。人に優しいデザイン、心にも作用するデザインを目指して今後も1歩ずつ前を向いて行く必要がある。



「みんなに優しく楽しいデザイン」 ロンドン交通博物館のユニバーサル洗面台

公開講座紹介

広がるデザインワールド

伊豆裕一 (デザイン学部生産造形学科)

近年、デザインの対象は、新しい製品・サービスの開発や、新たな体験や経験を産み出す上で重要となる、インタラクションと言われる領域へと広がってきました。インタラクションデザインとはどのようなデザインでしょうか。まずは、以下の問題について考えてみてください。

問題1：新しいスマホ (i-phone などのスマートフォン) のデザインを考えてください。

問題2：スマホを、指を触れることで操作する画面のデザインを考えてください。

問題3：知らない人と、楽しくコミュニケーションできるようになる方法のデザインを考えてください。

まず、問題1について、多くの方が液晶パネルの付いた電子端末のデザインを考えたのではないのでしょうか。技術に詳しい方であれば、腕時計型や眼鏡に組み込み可能な小型端末の製品化が、すぐにでも実現可能であることをご存じであったかもしれません。このような製品の色や形を対象としたデザイン領域は、プロダクトデザインと呼ばれ、デザイナーは、扱いやすく、魅力的な外観の製品開発に貢献してきました。同分野における日本のデザインクオリティは、世界一と言っても過言ではない状況が続いてきました。しかし、近年、グッドデザイン賞 (G マーク) において、韓国メーカーの液晶テレビが日本の製品を抑えて上位の賞を受賞するなど変化が生じています。

つぎに、問題2について、多くの方がアイコンと呼ばれるタッチパネルのグラフィックを考えたのではないのでしょうか。このようなデザイン領域は、ユーザーインターフェースデザインと呼ばれ、近年急速に発展を遂げて来ました。同領域におけるデザインは、スマホやテレビなどコンシューマー向けの製品に限らず、高度な診断を可能とする医療機器の操作画面や発電所の制御システムなど、社会インフラ分野においても重要度を増しています。

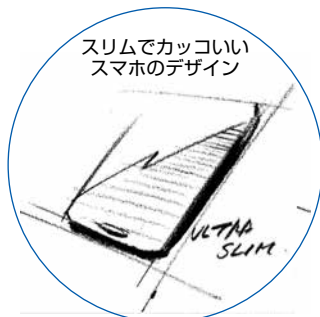
最後に、問題3について、どのようなデザインを考えましたか。情報端末とソーシャルネットワークを組み合わせた新しいサービスを考えた方もいらっしゃるかもしれません。しかし、特に最新の技術を使用しなくても、共通の趣

味を持つ人が知り合えるパーティーや、そのための名札や名刺をデザインしてもいいかもしれません。このような、体験や経験を対象としたデザインはサービスデザインと呼ばれ、近年、新しいデザイン領域として注目を集めています。

ここで、問題2と問題3のデザイン領域は、広くはインタラクションデザインとも呼ばれます。1980年代、アイコンとマウスで直観的に操作をするコンピュータの開発がきっかけとなり、人と製品 (モノ) のインタラクションを対象としたデザイン領域として名付けられたのが始まりとも言われています。インタラクションデザインは、その後、人とモノから、人とシステム、人と人の関係も含むデザイン領域として発展して来ました。

インタラクションデザインは、今や世の中のほとんどのサービスに関わっています。たとえば電車に乗るとき、以前は切符を買って、駅の時刻表を見て、時間通りに来るであろう列車を待っていました。しかし、今では、券売機、自動改札機、駅の案内システム、列車運行システムなどがひとつのシステムとして管理され、様々な情報を提供することが可能となりつつあります。子どもから高齢者まで誰もが安心・安全に使用でき、そこで働く人たちには、適切な情報を提供することでミス事前に防ぐようなシステム開発にデザインは無くしてはならない存在となっています。言わば、バーチャルな世界から現実の公共施設や都市全体までデザインの対象領域は大きく広がっています。

現在、私たちの生活を取り巻く消費社会は大きく変わろうとしています。将来的には、身の回りのものは自分でデザインする時代が訪れると言われていています。実際、今でも「ファブラボ」といって人々が自由に3Dプリンターやカッティングの機械を利用できる施設も登場しています。それらの機器を誰もが手軽に買えるなら、家のパソコンでのものづくりも夢ではありません。これからのデザインは、このような変化に対応しつつ、いかにデザインを通して社会に貢献していけるかが一層重要になってくるといえます。



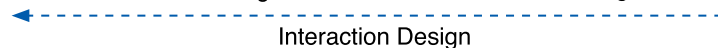
Product Design



User Interface Design



Service Design



「SUAC芸術経営統計」による我が国のアートマネジメント向上への貢献

片山泰輔（文化政策学部芸術文化学科）

文化・芸術研究センターでは、アートマネジメント分野の重点研究プロジェクトとして、平成23年度より3か年にわたって「我が国の芸術団体・文化施設等の経営状況に関する基礎的研究」に取り組んできている。

我が国には、文部科学省が3年ごとに行っている『社会教育調査』や、公益財団法人全国公立文化施設協会（全国公文協）や日本オーケストラ連盟などの機関が実施する分野ごとの調査はあるものの、分野横断的に、かつ、財務面、人材面を含む詳細な経営状況を把握できる統計調査は存在しなかった。通常、企業であれば従業員数や平均賃金、各種の財務データに関するマクロ的な状況を視野に入れながら経営を行っている。行政においても、職員数や経常収支比率、公債依存率等といったマクロ的なデータを参考にしながら自らの計画をたてている。しかし、文化施設や実演芸術団体等においては、他の団体の経営状況と客観的に比較することなしに、自らの経営を進めなければならないのである。統計データの不在は、文化施設や実演芸術団体の経営にとって問題だけでなく、これらに対して支援を行う国や地方自治体等にとっても由々しき状況である。なぜなら、補助金を受け取った団体の経営状況の変化を客観的に把握することができなければ、政策の効果を測ることができないからだ。

そこで文化・芸術研究センターでは、平成23年度にプロジェクトを立ち上げ、翌24年度にはセンター初の専任研究職を配置し、既存の統計や調査の現状と課題を整理するとともに、今後どのような項目のデータがあれば有益であるかといった点について研究を進めてきた。日本アートマネジメント学会及び日本文化政策学会の大会で発表を行い、各分野の専門家の意見等を聴取し、平成25年度は、関係団体等の協力のもとに、統計整備に向けた調査を開始した。調査分野としては、美術館等、劇場・音楽堂等、実演芸術団体、自治体文化財団の4分野に設定し、それぞれ最も効率的な調査方法を模索してきた。美術館や自治体文化財団等については、本学が自ら調査票を送付・回収する方法をとったが、オーケストラについては、日本オーケストラ連盟が毎年行っている調査に追加項目を加えてもらうかたちでデータを収集した。劇場・音楽堂については、文化庁から委託を受け実態調査を行う全国公文協と連携することになり、本稿執筆時点で調査実施中の段階にある。

このような大規模な調査を経て、平成25年度末までには様々なデータが収集されることになる。この結果をまとめた集計表は、「SUAC芸術経営統計」と銘打って、一般公開される。文化施設や実演芸術団体の経営者、国や自治体等の政策担当者や世界中の研究者が、本学の専用Webサイトからエクセル形式の集計表ファイルをダウンロード

できるようになる予定である。

このように本学文化・芸術研究センターとして、大規模な調査を実施することになった平成25年度であったが、当初は予想もしていなかった大きなうねりがこれに重なることになった。文化庁では平成25年度から新規事業として「大学を活用した文化芸術推進事業」を実施することになり、公募により予算額4億円の補助金が全国の大学に交付されることになった。補助事業の目的はアートマネジメント人材の養成、それも、美術館や劇場・音楽堂等ですすでに働いている実務家の能力開発である。アートマネジメントは本学が開学以来、力をいれてきた領域であり、特に大学院文化政策研究科は日本で唯一のAAAE(Association of Arts Administration Educators)加盟大学院として、アートマネジメント分野の実務家養成のための専門教育を社会人や留学生を含む多彩な学生に対して行っている実績がある。そこで、本学としては、全国の文化施設や実演芸術団体の役員や職員を対象とした本格的な実務家教育プログラム「文化施設・実演芸術団体のためのアートマネジメント実践ゼミナール～中長期の計画策定を通じたアートマネジメント人材育成～」を提案した。この公募には全国から60を超える大学から応募があったが、本学の提案も27大学のうちの1つとして採択され、初年度として1300万円（平成26年度は2700万円）の補助金を得て、3か年にわたる実務家教育プログラムがスタートすることになった。このプログラムの特徴は、第一に、講義を聴くだけの受け身の講座ではなく、受講者が自らの団体の中長期計画の策定に取り組み、その過程で生じる様々な課題をゼミ形式の講座で発表し議論しあうことで実践的に学ぶ点、第二に、前述の本学大学院の国際的なスタンダードにそったアートマネジメント教育の体系にもとづき理論的に学ぶ点、そして第三は、本学文化・芸術研究センターで整備を進めているSUAC芸術経営統計のデータを教材として活用し、それぞれの受講者が自らの団体の経営状況を客観的に分析できる点である。

本稿冒頭で紹介したSUAC芸術経営統計は、将来、現場の方々を活用してくれることを期待した「基礎研究」として準備してきたものであったが、今回、奇しくも、文化庁の補助事業に採択されて「実践ゼミ」を行うことになったことで、そのデータを直ちに現場の経営改善のために活用することが実現したのである。しかし、今回の統計整備や実践ゼミは、学内の競争的資金や国の補助金等、期間限定の資金によって成立している。研究、教育、社会貢献の3つが一体となって同時進行するような取り組みが、今後安定的な資金を得て、本学における恒常的な活動として定着していくことを期待している。

活動紹介

詩人 吉増剛造講演会 映像とともに

— もうひとつの『ブラジル日記』／旅する詩稿 —

土肥秀行 (文化政策学部国際文化学科)

当講演会は、静岡文化芸術大学平成 25 年度イベント・シンポジウム等開催費の助成により開かれた(同大学 176 大教室、2014 年 1 月 24 日)。学内の教職員や学生、一般ら、合計 70 強の方々の熱心な参加を得た。学外からの来場者もありありがたいが、普段のイベントではみられないほど多くの学生(1 年生から 4 年生まで、加えて卒業生も)が会場を占めたのは驚きであった。やはり吉増氏への関心と期待の高さがうかがえた。



まずは吉増氏のパフォーマンスで幕を開けた。壇上中央に置かれた「怪物君」(311 以降書き溜められている 500 枚をこえるグラフィック性の高い詩稿)を上から横から、吉増氏が手持ちカメラで背後の巨大スクリーンに映し出して行く。厚みのある側面に、「若林奮さんの作品みたいだなあ」との吉増氏のつぶやきが漏れる。瞬間われわれは、いまやその紙の束がひとつのオブジェと化していることに気付く。おもむろに原稿をめくりつつ、氏にとっては久方振りとなる朗読行為に移っていく。言い淀み「・・・」も「てんてん」と高低の抑揚つきで読まれるに至り、にわかにそのオブジェの存在感が増す。それまで関係者のあいだで「旅する詩稿」や「ノート君」とも呼ばれ、どう扱うべきかわからず、どうにも掴みにくかったものがようやく実体をあらわしてきた。

今回の講演のテーマは「吉増氏にとってのブラジル」だが、氏とブラジルの関わり合いの深さを示したのが映像作品 gozoCiné である。吉増氏が主にブラジルで撮影した短編 2 本が準備された。まず『花火の家の入り口』(2006)では、赤土や蟻塚といった、吉増氏にとって 40 年を越えるブラジルとの付き合いのなかで育まれたトポスが紹介される。海岸の町パラチの歩道ですれちがう野犬の足音が聞こえ、映像詩ならではの偶然性に氏と会場はハッとする。こうした詩人の目を通した「ブラジルらしさ」を感じるシークエンスから、サン・パウロ大学日本文化センター再訪へと場面は進んでも、吉増氏が 1992 年から翌年まで客員教授を勤めた折の同僚よりも、むしろ大学内の毒蛇研究所そしてジャカラнда並木を探してカメラの視線はさまよう。一本目の短編終了後は、「浜松らしさ」を出すために、本学国際文化学科 3 年生の岡崎ケンジ君が、吉増氏の代表作「オシリス、石ノ神」(1984)のポルトガル語版 Osiris, o Deus de pedra を朗読する。岡崎君の横に立ち、自作翻訳のリーディングに熱心に耳を傾ける吉増氏は、直後に「それぞれの言葉に宿っている心がある」と感想を語ったが、ポルトガル語訳とその朗読に自分からも、原文からも独立している生命を感じたのだろう。さらに回想のうちに、詩「オシリス、石ノ神」に描かれる大阪=奈良の県境越え鉄道が通るトンネルが、後年の再訪時に実在しないことを発見した旨が明かされた。われわれは、詩における想像力の強さにかなりの衝撃を受けた。

2 本目の短編『ジャカラнда』(2008)において、同名のブラジルを象徴する花の紫色からピンク色までが、残像が映り込む軌跡効果によるボカシによって、幻想的な美を生んでいた。吉増氏がジャカラндаによって自分の中のブラジル像を深め、新たな映像を切り拓く一方、連想されるのが、未来派の影響を受けていた詩人オズヴァルド・ヂ・アンドラーヂ(1890-1954)が、ブラジル文学の刷新のため、「ブラジルの木」Pau-Brasil にあやかって「ブラジルボク詩宣言」Manifesto da Poesia Pau-Brasil (1924) を発した文学史的事件である。ジャカラндаの花と木は講演会フライヤーの上半分を占める写真に確認できる(<http://www.suac.ac.jp/news/completion/2013/00330/> 吉増氏撮影のこの写真は思潮社刊『表紙 omote-gami』所収)。

そしてブラジルを代表する詩人アロルド・ジ・カンボス(1929-2003)との友情を吉増氏が証言する。スクリーンには、1996 年の ETV 特集でブラジル・ハイカイを吉増氏が取材した番組から、サン・パウロのジ・カンボス家を訪ねたシーンが流れた。吉増氏を前にして、「古池や」をビジュアル詩に訳した際のコンセプトを語るジ・カンボスの瞳の輝きが、ダイレクトに伝わってくる。続いてジ・カンボスの詩を 2 篇、岡崎君がポルトガル語で朗読した。作品からは(意味ではなく)ひたすら言葉の連なりそのものを受けとめなければならないので、朗読・黙読ともに難儀であるが、とてつもないエネルギーの塊であった。ジ・カンボスの肖像は、先ほどのフライヤーの下半分の写真に見つけられる。

映像上映と朗読はここで終わり、セットを変えて石川清子教授との対談がはじまる。まず吉増氏が挙げたのが、石川氏が翻訳したジェバルの小説『愛、ファンタジア』であり、後天的に与えられた言語であるフランス語という一種の「かくれみの」によって「隠すために書く」というモチーフである。対して石川氏は「怪物君」の細密文字が帯びる不可視性を指摘する。会の冒頭で確認したように、吉増氏の手持ちカメラのズームによってはじめて読めるサイズの文字であった。最後に、会場の学生、一般の人との質疑応答の時間となった。短編上映中、吉増氏は壇上から断続的にコメントしていたことから、「撮っている吉増さんの声、さらにライブでコメントする声が聞こえてきて、吉増さんに自己を重ねることができた」との感想が寄せられた。そして吉増氏の「隠すために書く」姿勢から、「傷を負うことによって明らかとなるベールの存在」といった逆説に思い至った学生もいた。会場を覆う、日常とは異なるなんとも心地よい雰囲気、参加者全員によって共有されている感覚が、めずらしく本学で感じられた。後日届いた吉増氏の言葉、「『怪物君』の初めての発語は、於・怒・呂・喜でしたね」に、あの場での奇跡とは、詩人による発見とハプニングに立ち会えたことだと気づいたのであった。



講演会の企画運営にご協力いただいたオシリス社と思潮社に感謝いたします。

○第7回静岡国際オペラコンクール開催記念 オペラ・サマーセッション2014

第6回オペラコンクール入賞者がふたたび浜松の舞台に！浜松国際ピアノコンクールの入賞者もゲストにお迎えし、静岡、浜松そして世界が誇る両コンクールの入賞者による初の協演もどうぞお楽しみに。

日 時 平成26年7月27日（日）午後2時～

会 場 静岡文化芸術大学 講堂

出 演 イム・チャンハン（バリトン・第6回コンクール第3位受賞）

高橋 絵理（ソプラノ・第6回コンクール第3位、オーディエンス賞受賞）

《ゲスト》

佐藤 卓史（第8回浜松国際ピアノコンクール第3位、室内楽賞受賞）

入場料 無料（※要申込み、先着順）

○第7回静岡国際オペラコンクール 今秋開幕！

2014年11月、3年に1度の「静岡国際オペラコンクール」がアクトシティ浜松大ホールをメイン会場として開催されます。選び抜かれた声の競演をお楽しみください。

チケットは今年8月から販売を開始します。詳しくは、公式ウェブサイトをご覧ください！

開催期間 第1次予選：11月8日（土）～10日（月）

第2次予選：11月12日（水）～13日（木）

本選・表彰式：11月16日（日）

お問合せ

静岡国際オペラコンクール実行委員会事務局

〒430-8533 浜松市中区中央2-1-1（静岡文化芸術大学内）

電話：053（457）6446 FAX：053（457）6447 Eメール：opera@suac.ac.jp

編集後記

東日本大震災から3年が経過しました。この3年は本学の教育・研究分野である「文化とデザイン」の役割を改めて問う歳月であったと思います。災害からの物心両面の復興、社会の発展、繁栄、成熟、安定のために、文化とデザインに何ができるのか。何をすべきなのか。教職員も学生も着実に思考と実践を重ねてきました。このニュースレターでお伝えしている活動一つ一つに、積み重ねから創造されるささやかな“実り”を感じて頂ければ幸いです。（St.）

Art & Culture

文化と芸術

文化・芸術研究センター
ニュースレター

Vol.19

March, 2014

発行人：三枝成彰 編集人：富田晋司

発行：静岡文化芸術大学 文化・芸術研究センター
（事務局 静岡文化芸術大学 企画室）

